
見習い魔術師の100の呪文

ユキカゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い魔術師の100の呪文

【Nコード】

N2137W

【作者名】

ユキカゴ

【あらすじ】

神風特攻隊に任命され、死を覚悟した主人公…。

しかし、敵への衝突寸前に気を失って…。

現代武器と古代魔術といろんなものが混ざった世界に迷い込んだ！

？

第一章 プロローグ（前書き）

この物語は、フィクションです。

実際の人物等とは、一切関係ありません。

これ、鉄板だよな？

〈登場人物〉

主人公（名前なし）

ニホン国という国にいたが、戦死。
しかし、別世界に飛ばされる。

ノエル^{II}フォート

説明なし

大陸

大国リーシップ

四つの島の総称。

ガレー島 ドルグレ島 フォーミル島 ミシエール島があり、フォ
ーミル、ドルグレ ミシエール ガレーの順で大きい。

ニホン国

神風と呼ばれる、突撃部隊で、敵軍を一掃するという馬鹿げた国。
勢力拡大中

第一話 魔術師

「…ここは…つく…」

俺は、どうしてこんな所に…。

つて、俺…なんで…あれ？あれ？…。

わっわけわかんねえ！なんか、自分の記憶探っても、何も出てこねえ！

どういう事だよ…。

とりあえず…持ち物を確認…。

えと…携帯電話…？にしては、ごついもの…、穴が開いてるところから声を聴くのはわかる。

でも、このチャンネルってなんだ…？

…まあいいや…ほかは…あ、ない…。

「持ち物は…これだ…ん？何か落ちたな」

一面草原で、草しか見えないところで、何か落ちて、草がガササって音がなった。

それを見ると、それが…銃器であつた事がわかつた。

「わっわわ！なんで俺、こんなもん持つてんだ！くそっ！」

それを、驚いて投げ飛ばす。

すると…思ったよりも鈍い音がする。

てか、さつきみたいいな草の音じゃない。

何か…こう、コツコツしたものに…例えるなら、石…。

でも、そのあたつた方向を見たら…自分よりも、メチャクチャ身長のでかい色がねずみ色した石の化け物だつた。

「そんなんじゃないわ、ゴーレムは倒せないわ！『イールグ』！」

俺の横で、彼女は起き上がり、銃弾が弾かれている様を見て、ゴーレムの方向に、左手を構えて…人差し指を向ける。

そして、何か を唱えて、風を生み、放つ。

それは、渦を巻いて、まるで、槍のように伸びて、一直線にゴーレムを貫く。

それが当たった瞬間、ゴーレムは粉々になった。

「すっ…すげえ…」

「ふう、大丈夫？君、名前は？」

その人は…いや、彼女は、そう問いかけてきた。

俺は…と言いかけたが、口を閉じた。

「ん？どうしたの？」

え、あ、う…どうして…だ？

口から…出てきそうで、出てこない…。

自分が放ってきたはずの…あの発音が…あの言葉が…出てこない…！？

「な…名前…俺の…うっうあ…名前が、俺の名前が思い出せ…思い出せない！？」

どうして！？さっきまで…いや…さっきの時点で忘れてたのかも…。そうであっても…これは…こんなの…うっぐ…。

「記憶喪失…そう、君…家に来ない？」

「え…？」

「フフ、どうして…？って顔してるね」

彼女は、笑みを溢して、そういう。まっすぐに俺にそういう。

それにしても…とても…可愛らしい女性だった…。

顔は少し子供っぽくて、前髪をピンでとめて、顔の半分に髪がかかって、もう半分はその髪を払っている。

その払っている髪にはカエルの髪飾りがつけられ、髪の色は、黄色。服は、カッターシャツに、黒いスカート。長いソックスに、茶色の革靴。

そして、緑の瞳…。

俺は、彼女のその姿に惹かれた。

太陽の燦々とした草原に、二人。

俺と彼女がポツンといて、名前をなくして絶望する俺に彼女は手を伸ばして…

「私はノエル、ノエル＝フォート…魔術師よ、宜しくね」

「ま…魔術師…？」

「そ、まあ詳しい話は家でしましょうか」

俺は、差し出された手を掴んで、身を起こして、彼女の家へと向かった。

無限に広がる草原は、揺ら揺らと…風に揺れていた。

第一話 魔術師（後書き）

登場人物追加

new ノエル＝フォート

魔術師。主人公（名前なし）を助け、彼を家へと招く。

「え？ああ…、イーलग、ね」

彼女が、言葉と言葉の間に何かを発すると、風が手から目に見えるぐらいに激しく螺旋を描いた。

「それ、どうやるの？」

「これは、呪文スベルよ」

「呪文？なんだ、それ」

俺は、彼女にまもっている風をみつつ、彼女に質問をした。

回答としては、呪文は魔術師の根本にして、魔力源であり、それが魔術師の証明でもある。

とか、なんとか…俺には難しくてよくわからなかった。

「あ、ねえ君…私の弟子にならない？」

「で、弟子？俺が？魔術師の？」

「そう、別にいいでしょ？」

「…」

彼女の目は、キラキラと輝き、若干俺よりも背の低い彼女は、上目で俺を見る。

それに耐えきれず、俺は目をそらすが、すぐに彼女はそれを追った。

「とりあえず、これから君は、魔術師の弟子…見習い魔術師として

.....

「ただいまあ〜！」

そこは、二階建ての家。

広い草原にちよこんとある家。

まるで、砂漠の中のオアシスかのようである。

「まったく…なんて所に家建ててんだ…」

「おかえりなさい、ノエル…あら、その子は？」

「帰ったか、ノエル！」

扉を開けるとそこには、グルグルメガネをかけ、オカッパ頭の女性とボサボサ頭のスーツの男がいた。

「紹介しよう、この子は…えと…うん、ロシル！」

「おい、ちよ…」

「よろしく〜ロシルくん」

「…お嬢、こいつ…」

俺は、色々と混乱していた。

第三話 呪文

勝手に命名された名前：ロシル、ロシル「フォート」…。
なんでも、英雄の名前らしい。
つて、なんか俺勇者フラグ立ってないか？

「俺は、ソイル「ネードだ、んでこっちは本屋ノブ子」

「…とりあえず、ロシルでいい、ノエル…それで、魔術師ってのは…何するんだ？」

俺は、そこが疑問だった。
特に注目するべき点。

「お嬢、もしかして…」

「フフ、そうよ彼は見習い…。ロシル、あなたがその魔術師を疑問に思うのも無理はないわ…」

いや、無理ないってか、ほぼ無理やりだったわけだが…。

「とりあえず、あなたは今後からここにすること」

「なんでだ」

「魔術師は、危ないのよ」

「魔術師というのは、この世にあるという100の呪文スベルを、全て得たものをいうの、まず第一に、魔術師は、誰にでもなれる」

「誰にでも？」

「ええ、私かなれないこともないわ」

と、本屋さんが言う。

グルグルメガネが目立つ。

「魔術師は、基礎である呪文を意のままに操る事ができるために、呪文を言葉にできないとダメなの」

「というところ？さっきの奴か、ノエル」

「ええ、まあ…あれは手の平で作り上げた風を方向を示して突風にする呪文ね、あれは言葉として成り立たない」

「言葉として成り立たない…？」

「ええ、そうよ」

これから、少し話が長く続いたので、要約する。

魔術師は、呪文、というものを、自分に取り入れる事で、一つの呪文を扱うことができる。

そして、それらは、また100個あり、それらすべてを集めた者を魔術師とすることが、国家で決められている。

らしい。

まあ、それはそれでいいとして、世界の構成についても、詳しくといた。

それについては、地図を見せられて説明された。

…知っているはずの島はない。

四つの島がその地図にはあった。

そして、それら四つの島の二番目ぐらいに大きな島をノエルは指をさして

これが、私たちのいる、フォーミル島よ
といった。

…なるほど、これが…。

F・M・islandと書かれたその島。

それから…魔術回路についても教えられた。
魔術回路とは、呪文を使う回数。

それがなくなると…死ぬ。

「なるほどなあ、大体わかった」

「あ、それとお水を頂戴、ノブ子」

「ええ、はいロシルくん」

と言って、ノエルは、玉座に座り、俺はそこら辺のイスに座り、
手渡されたグラスを受け取る。

ノエルもまた同じようなグラスを渡される。

「ごくつごくつ…ぷはっ…フフ、それで…ロシル、魔術師の弟子に
なる気はある？」

「ごくつ…ふう、またその話が…もう、あれだけ話されたんだ、そ
れは呑むよ」

互いに向き合い、そして俺はそれを了承した。

無論、断つてもよかった。

だが、もう空気の流れが、俺に同意を求めているのだ。

まあ、別によかった。
部屋を見渡す。

銃の整理をしているソイル。
ノエルから飲み干したから、もう一杯と言われ、はいはいと言って
そのグラスを受け取る本屋さん。

そして、天井につるされたシャンデリアが、キラキラとして綺麗だ。
だが、明かりはそれだけしかなく、周りを見ると、端は少し薄暗い。
…でも、どうしてだろうか、この光から、少し…不穏な物を感じた。

「そう、じゃあ右手を出して」

「こっつ…か？」

俺は、頬に片手を置いてバランスを取る彼女に、右を差しだした。

「そうそう、じゃあ、やるね」

そういつて、彼女は、頬をついてた方とは別の手を俺の右手のすぐ
上に出して、文字通りパーで、俺の手に重ねた。

すると、急に火でもついたかのように、俺は焼けるほどの痛みとい
うよりも、刺激に近い物を感じた。

「あつっ」

「だめ、手を離したら、魔術回路が壊れちゃう」

「な、何をしている…んだ？」

俺は、熱さに耐えつつ、彼女の柔らかい肌の感触を味わう事もなく、
そう尋ねた。

すると、彼女は、こう答えた。

「魔術回路を、開くの」

それが…こんな…。手のひらから感じていた熱が、やがて体に蔓延してきていた。

俺は、段々とその熱さに耐えつつあった。
どうやら、少し慣れてきたらしい。

「…おし、そろそろいいかな」

「もう、大丈夫…なのか？」

「ええ、手を離して…そして、こう唱えて、ノス」と

…ノス

第四話 ノス

「ノス……と唱えた。

「いや、口にすることもなく、ただ、口元で声を発しようとして、それが別の言葉になって……とか、そういう感覚だ。

声は出ている。でも、言葉としては成り立たず、人に聞こえない。

「いや、聞こえていたとしても、ノスは、ノスとしか聞こえていない。

けれど、発した言葉は、ノス、言葉であるノスと同音であるのに、違う。

「これで、契約終了……さあ、あなたもこれで、魔術師の卵の一人」

「ま、待てよ……魔術師は誰にでもなれるんじゃない」

「そうよ、誰にでもなれる。だけれど、力を持たなければ、押しつぶされちゃうもの……そうねえ……例えるのなら、アリの足を潰してしまふ事あるよね、あれのアリの気持ちね、痛いでしょう？ 苦しいでしょ？ それを補うというよりも、そもそもそこに何か風圧、壁、段差があれば、もしかすると、アリは生き延びることができるかも知れない。そういう理論で、安全対策として、魔術回路っていう魔術師の元素をいつでも出していられるようにしてあげる物、それがノス……。でも、一回ぼつきりだけだね」

説明が長い……まあ、俺なりの解釈だが、おそらくノエルは、力負けて、死んじゃうぐらい呪文というのは、強い力を秘めているから、それを弱めてくれる魔術回路を、常に出す物として、ノス、という呪文があるから、それを発し、自らを守らせている……と言いたいのだろう。

少し、こんがらがってくる話ではあるが、まあ、そこらへんは、気にしたら、負けなのかもしれない。

「なあ、俺はこれからどうす「来たわ、ノエル…デーモンよ」「

「へえ、結構お早い登場ねえ…あ、ロシル、ごはん炊いてて

「ちょ、おまつ…何がどうなって…いや、待てって！俺、ごはんなんで、炊いたことないぞ！？」

「うっそお…！？「本当だ」「

彼女は、ものすごく驚いていた。

まあ、俺もだが…。

「ま、まあいいわ…ノブ子！ソイル！行きなさい！」

ノエルが、それを言い終えるのと同時に、風が窓から入ってきた。そして、銃声と爆発音が聞こえる。

…数秒後、扉が開かれ…。

「終わったわ、ノエル」

「お嬢、かたついたぞ」

「一人、取り逃してるわよ、ガクファ」

と、ノエルが二人の後ろを睨んで、何かを唱えると、その向こうにいた兵士は、動きを止めて、草叢に、倒れた。…距離は、およそ50m。

その距離から、ほぼノーモーションで、一人が倒される様を見て、俺は少し震えた。

恐ろしく、そして……ここにいる者たちが、只者でないという事の確信を得たことの満足感。

それらが、混ざって、不安な震えと喜びの笑みが零れ、

「俺、魔術師になってみるよ」

と、三人に向かって、言った。

第五話 反逆と混迷 前篇

「んーで、お嬢」

「何」

「襲ってきた奴らの一人に、こんなもの持つてる奴がいた」

と言って、ソイルは折りたたまれた白い紙をノエルに手渡した。
それを開いてノエルは…それをビリビリに破り捨てた。

「ちょ、おま…」

「いいの、こんなの…」

「国王からの手紙だろ？またラブレターだったのか」

「まあ、そういう事にしといてちょうだい」

国王からラブレター…国…王…。

「…」

「どうした、ロシル」

「い、いや…ただ、国王からの手紙って、大切じゃないのか…って」

「ええ、まあ戦争に参加しろって言う奴だからね」

「だったら、行けよ…」

「なんでよ」

彼女に、権利はあるだろう…だが、

「国のためなら、身を捨てる、それが国民だろ？」

なんて、事を言った。

俺にとって、それはなぜか当然のように、口癖の類のように感じられるほど自然に発せられた言葉だった。

「国民？いいえ、私たちは、アッテヘルカ反逆者よ」

「反逆者…？何言ってる…だったら、こんな手紙…」

「つまりは、死ねって言っているのよ、あの王様は」

俺は、その 死ね という言葉を聞いた途端、急に何か違和感のよ
うなものを感じた。

…まるで、前に聞いた言葉で、トラウマだったように。

その時、急に地響きがした。
外だ。

大きな何かが、こちらに近づいてきている。

「悪魔：ノブ子、ソイル、ロシル、準備しなさい」

「言われなくても、準備完了よ」

「…いけるぞ」

俺は、何もかもが…急速に変化を始めたこの世界が、ぼやけ始めて、その場に倒れた。
まるで、意識が…奥底のどこかに引きづり込まれるようだった。

「ロシル!…シ…!…!」

くそ…何も、聞こえやしねえ…や…。
そして、俺は目を瞑った。

「…どういう事!ロシルが!」

「多分、悪魔に魂吸われてんだ」

「じゃあ、神姫シンキを呼ぶわ、ノブ子魔方陣の用意!私とソイルは、あいつ進行を阻止!」

「了解」

どうして、ロシルが…やっぱり、魔術回路の解放には、限界があったの!?

駄目よ…ダメよ、魔術回路を解放して死ぬなんて…!

魔術回路をつかえこなせないときに解放してしまうと、生气も一緒に抜けてしまう。

ただし、それは一時的な話。

だけれど、あいつがすぐに現れたから、それでその生气を一気に吸われて、気を失った…。

そう、考えよう。

いや、そうでなければ…自分を抑えきれない。
感情が爆発して、今にも悔しくて、自分を憎くて、
自虐してしまいそうだから。
今は、彼らを…信じ、ロシルを助けるのが先。
そう、自分に言い聞かせた。

「イールグ、」

と、唱えると、手から強風を小さくつくりだし、周囲の風おも吸い込み始めた。
そして、圧縮…。
激しい音とともに、竜巻を作りだして、それを指先をまだ姿見えぬ方向へと放つ。

「ノエル！2時の方向に、魔弾が来てる！」

「シエイケエル、」

シエイケエルは、周囲の魔弾を感知して、跳ね返す呪文。
ロシルを置いて、草原へ出たノエルは、ほぼ360 悪魔に囲まれていた。

「通りで、生気の吸収が早いわけね、ソイル狙撃銃スナイパーガンで、何か見える？」

ソイルは、家の屋根から、長さ1050mm程度の全長がある。
それを、軽々しく片手で構えて、スコープを覗きそして、相手を確認する。

「ノエルが、打ったイールグの方向にいる」

「距離は…ああね、まあまあじゃないかしら」

そういつて、ノエルは弓を構えるように右手の人差し指と中指を丸め、

親指でそれを抑え、そして引いていく。

すると、そこから電撃の糸のような物が、蛇のように絡み付いて、そしてビリビリという音を激しくたてて、それは動く。

そして、左手には、黄金の弓が握られ、イー Лугが目指した先へ構え、放った。

「、カルティスオウネ、」

というと、放った矢は、電光石火の如く、光の速さで直進した。

第六話 反逆と混迷 後編

「復讐？まあ、それも悪くはないけれど…もう少し、数を減らせてくれないかしら？あんまり疲れたくないの」

「そっさい、私は、指を天へと掲げる。」

そして、‘ティツチエ’と唱えた。

すると、指先から、閃光が広範囲を包み、そして影の悪魔を消し去った。

周囲は、チリ一つ残らず、まるで何もなかったようになった。

だが、その中で幾つかの影がノエルを襲う。

「フフ、B級悪魔には、ティツチエは効かないっけ？じゃあ、イールグ、」

目の前に、突如として現れた影に、突風が襲う。

彼らは、影をグニャグニャにされて、吹き飛んだ。

形は、崩れてそして跡形もなく、消えた。

そして、最後に強敵と思われる奴が姿を現した。

「へえ、ゲーデか」

「異界の地の者を引き取りに来た」

「残念だけど、ここには異界人はいないわよ？」

黒い山高帽と燕尾服を着た男の姿がそこにはあった。

私から見ると、長身で、大よそ180cm程度はあろうか、それぐらいはあった。

彼は、ゲーデ

生と死の間の仲介者なんていわれてる。

そんな彼との面識というと、魔力を大幅に出した時に自分が力尽きそうになり、そこへゲーデが来て、魔力供給をする代わりに、死者を送れと言われている。

無論、ここには今死者はいないから、どうにもならないわけだが。

「そうか、ではまた何うとしよう、してノエルよ」

「なに？」

「私は、こう…ファクションというものはわからないのだが、その姿は、少しどうかと思うぞ」

「なんのことがーしーらー？」

ちよつと頬を膨らまして、怒る私を見て、ゲーデは言葉を選ぼうと少し焦っている。
フフ、かわいい。

「…ごほん。まあ、私はこれで失礼する。ノエル、手をこちらへ」

「魔力供給ね、わかったわ」

私は、両手をパーにして、目を少し閉じる。

ゲーデは、その上に手を置く。

黒い手袋から熱気が伝わり、私の手を段々とあつくする。

「終わった、ノエル…いいか、あまり無理をするなよ」

「あなたに言われちゃうの？あらら、恥ずかしいわ」

まあ、彼にはわかられちゃうんだろう・・・。

私が、彼と魔術回路でつながっているのだから。

魔術回路は、魔術師の魔力の通路。

それが繋がれるということは、魔力を共有ということ。

私とゲーデは、魔力が送受信できる。

魔力連結という。

ただし、できる人数は3人までと決まっている。

魔術回路は、共有者の命にもかかわる・・・。

一人が死んだら、ほかも死滅する。

それが、魔力連結の怖い所だ。

魔術師の根本である呪文の受け渡しも、魔力連結で、できる。

私の師匠、エドワード・フォートと私は、魔力連結で、魔術師権限の受け渡しをした。

100の呪文と1の呪文。

それが、魔術師という者が持つものだ。

私は、1の呪文、「加護」がある。

1の呪文は、魔術師に問わず、持っている呪文。

そして、100の呪文は、魔術師の証明として、最後に自分が作る呪文。

100の呪文は、魔術師権限の受け渡しをした時、魔術師になる方の1の呪文となる。

「私、ノエル・フォートは、ここに血の契約を・・・」

「私、ゲーデ・アンデリフェン・デ・ビューカディオスは、ここに冠の契約を果たす」

「すなわち、私はゲーデ・アデュエブリフェツ・・・いいにくっ！」

「なっ、失礼な！君の名前と同じではないかっ！」

「もう…ゲーデでいいでしょ…？」

「却下だ。」

そんな時、ソイルとノブ子が近づいてきた。

ゲーデは、早くしろと言って、契約を急かせ、その契約は成立した。私は、このゲーデのフルネームをいつになっても覚えられない気がする…。

とりあえず、フォーミルに会う…必要がありそうね。

「フツ、あれが、新人魔術師君候補…」

「さて、どんな味がするんだろおなあ！」

「これ、急かしてはいけないぞ、シフォン」

「お前もよだれふけよお、エイピロ」

二人の男が、ノエルの家に住む、ロシルを見て、いや狙っていた。

第七話 魔導師

「さて、そろそろ動くぞ…」

この島の城の王、ラグナ・フォーミルは、二人の使者を用意した。彼らは、魔導師の道を進む者、魔導師。

そのエキスパートだ。彼らは、それぞれに持つ武器を自由自在に扱う。

オールバックの黒と白の縞々の髪型に、緑のフードコートを身にまとい、大鎌を片手で軽々と持つ男の名は、シフォン・ノイスクランチ。

黒いスーツ姿に、白髪の男の名は、エイピロ・ヤングマン。

彼らの使命は、ロシル・フォートの監視。

そして…エイピロはその使命を得たとき、ニヤリと白い歯をむき出しにし、ほほ笑んだ。

まるで、待ち浴びたかのように…。

ラグナは、それを見て、確かにほほ笑んだ。…が、一人シフォンだけは、それをしなかった。

「…ほう、貴君がああ魔導師に。ですか、ふうむ、またもや面白い方に…フッフ」

「るっせえ！行くぞ、ノエル！」

「え、ええ！シフォン！」

シフォンは、しばし、空を眺めここに至ったまでの経路の内、ノエルとの共闘を思い出していた。

城壁に囲まれた城、フォーミル城…。

そして、それをさらに囲む城下町……。
それらを見下すようにシフォンは目を細めて、こう言った。

「覚えてるか…ノエル…ここが、お前と俺の理想郷だったんだぜ…
こんな…薄汚れた大地が…！！ああ、くそ、チクシヨウ！くそ、
くそ、くそ！俺たちは、何のために…ノエル…くそ…。」

「な、なんだ？」

俺は、窓辺を見る。

妙に微動する窓。

そして…その先に…人の影。

「まさか、敵!？」

俺は、腰のベルトにつけていたハンドガンを手にする。

投げ捨てた後、ノエルが拾ってくれたのだ。

…そして、このハンドガンには、魔弾まがんという魔力を使った弾が入っ
ているらしい。

それは、持ち主の魔力を弾に変換することで、弾丸を供給する仕組
み。

『我が洗礼を受けよ、ラ・ビネスチエ』

と、俺がそれに気が付いたのは、吹き飛ばされた後だった。
壁を鉄球が通ったようにぽっかりと開け、そいつらは現れた。

「魔導師、とくじょ…なんてな？」

大鎌を持ったオールバックの男と、黒いスーツ姿の男が、こちらを見下してそういった。

かという俺は、吹き飛ばされて、家の壁で吐血してぼやける視界からそいつらを見た。

…確実に、やり手だ…。

「エイピロ、こいつは任せる、俺はやることがあるからなあ…」

「わかった、十分に楽しんで来い、シフォン」

そういつて、シフォンと呼ばれるオールバックの男が、開けた穴からさつきノエルたちが向かったところへと歩んでいった。

「ぐふつ・・・お前ら…一体…」

「フッフ、なるほど…君は知らな、なんだ…だけれども、君は知る必要はない、大人しく呪文を渡せ、それが君が生き残る唯一の手段だよ、ロシル・フォート君」

俺が…持つ…呪文…なんて、…ないぞ…。

「さあ、早く。ああ、そういえば手渡しはできないシステムだった…では、強制的に抜くでしょう…」

そういつて、物凄い早さでこちらへと飛び込んでくる。

咄嗟に俺はそれを横へと転がって避ける。

…壁からは、ボロボロと壁に使われていたコンクリートが零れ落ち、かつそこには平然と壁に腕を突き刺すエイピロの姿があった。避けなければ、…ああなつてたわけだ。

「ちょこまかと…動くな」

「あ、生憎^{あいにく}・・・俺はそんな趣味はないんでな…」

ノエルたちが戻ってくるまで…待つ…か。

いや、待てよ…さっきのシフォンってやつがあいつらの足止めをしてる可能性も…

「って、うわっ!」

俺は、またもや襲い掛かるエイピロの猛進からスレスレで避ける。

やはり、早い。

…けれど、見切れる…。

「このスピードについてくるとは…いいだろう、ではこうだ」

次に、エイピロは手と手を合わせて、ゆっくりと左右に伸ばしていく。

すると、そこから電撃が生まれ…。

「形勝とは、このことだろうか、私は君から残り数歩でたどり着き、かつ君は壁に追い込まれている、これはもはや…死を覚悟する所だろう」

電撃の中から、弓が生み出されてゆく。

それも、広げた分だけ。

「私は、このラ・ビネスチエを扱うアーチャーの魔術師・・・これぐらい明かせばわかるだろう?」

「…なるほどな、つまり俺はここから動くとその弓でやられ、動かなければ…貫かれるわけだ」

たとえ一撃をかわしても、次の攻撃では身動きは取れない。つまり、連撃が来てしまつとやられるという事だ。

「そういうことだ。諦める」

「殺してまで奪えるものなのか？これ…まあいいや…俺も俺でこいつを使ってやる」

そういつて、ハンドガンを強く握る。

「ふむ、投影武装とちがつて、実物武装の方が有利…なぜなら、反魔力効果があつて、魔力を相殺してしまうから…だが、有限ゆえにそれは投影に劣る！」

弓を構えるエイピロ。

俺は、それに対してハンドガンを構える。

…そして、銃弾は銃口から跳ね、そして…。

第八話 シフォン

「お嬢、新たな敵を確認したおそらく…魔導師だ」

「魔導師…ですって…？」

「数年前にケリはついたんでしょ？あの戦いで」

そう、私は…もう、魔導師じゃない。

魔導師に追われることはない。そう思っていた。

シフォン・ノイス克蘭チ。

彼とは、私がまだ魔導師として、国のために働いていたときに知り合って、その時に三導師と呼ばれた内の一人が私だ。

魔導師とは、自らの魔力を使って生み出した武器を使って戦う者の事で、これは才が求められる。

そして、私にはその才能があった。

ライトレイン
光龍という龍が、私の武器。

魔導師の武器は、生物であっても当てはまるが、それはかなりの実力者へのみだそうで、私は、それを平然とやってのけたわけだ。

魔導師として、私は生きて、そして…あの日がやってきた。

そう、それは…豪華客船、スカイウエーブ号での話。

魔導師の仕事は、国の密告者や犯罪者などを殺すこと。

重罪に当てはまるものが、これに該当する…。

そして、スカイウエーブ号に、ジャックを仕掛けたとされるメリュジーヌを確保または殺害することが、目標で、乗り込んだ私たちは、メリュジーヌの罠にはまり、スカイウエーブ号の乗客を生け捕りにされ、さらに私はメリュジーヌによって、魔力を失ってしまい、光龍を出せなくなった。

…だから、やめたのだ。

魔術師は、呪文を使うとき、魔力を使うが、呪文がその分負担してくれるために、私は少量の魔力を放てば、どうにかなる。そのため、私は魔術師となったのだ。

…最終的には、私の師を殺す事になったわけだが…。

「私に何か用かしら？シフォン」

「ああ…国王、ラグナ・フォーミル王からの伝言だ、急ぎロシルを渡せ。」と

「!?!?どういうこと!?!?ロシルが何をしたというの!?!?」

魔導師は、密告者や犯罪者を裁くだけ…。

私は、魔導師の時に、それをしてきた。

その方針が変わったのかはわからない。けれど…。

「あのロシルという少年…もしかすると、スパイかもしれない。それが理由だ」

「…そんな事、わかるわけ…」

「いいや、それをこれから確かめる、それだけだ…」

私は、フードコートを風になびかせて現れた男、シフォン・ノイス クランチの横を通ろうとする。

…すると、彼は両手を合わせて、そこから電撃を作り出して、そこから長い棒を生み出して、そしてそれを片手でつかんで、ブンツと回転して振るう。

それを、上半身を曲げて、手を地面につけて、かわす。

そして、そのまま重心を手において、私は後転して立ち上がり

「シフォン…どういづつもり…？」

と言った。

その時、シフォンは嫌悪の目で私を睨んでいた。

そして、大鎌の刃を私の喉元に向ける。

「悪いが、俺はお前にも用事があるんだよなあ…ノエル、いや…反逆者」

シフォンは、向けた刃を少し離して、勢いをつけて、私の喉元を狙いつけ、振るう。

…と、そこで、パキンツという音を鳴らして、刃は弾かれた。

「お嬢に手え出すとはな、仮にも同僚だったろ？」

「ふん、同僚は昔だ、それに魔導師の規則に則ってこうしているんだ。他者は首を突っ込むな」

シフォン…どうして…。

「ノエル、ロシルくんが心配だわここはソイルに任せましょう」

「…ソイル…」

「行け、ロシルを失ったら、お前の先を誰が継ぐんだよ」

「!?!?」

知ってたんだ…。

魔力連結の事…バレてた。

隠してたつもりなのになあ…やっぱ、真実を見抜く目には…わかつちやうのか。

彼は、呪文こそないものの、1の呪文「真目」しんがんを持っている。

真目は、どの距離に何があるのか、そして嘘を見破るとか、もうその類の目に見えるすべてを知ることができる目。

鷹の目とも言われたりする。

ソイルは、武装を開放する。

彼は、服の内側にあつた銃器を取り出して、戦いを始めた。

…どうしてなの…？シフォン…。

俺は、エイピロに向けて、引き金をひいた。

しかし、エイピロの矢が放たれる方が早く、目視でこちらに矢が飛んでくるのがわかって、すぐにひいた引き金の方の力が抜けた。

すると、銃口から気の抜けた弾がぼろつと落ちた。

それを確認するよりも先に、俺は顔に向かってくる矢を体を捻ってかわした。

何故か…スローで見えた。

一本一本の矢が、俺には見える。

「その矢…遅いな」

「それはどうか…一本一本は遅い…だが、お前は前を見すぎだな」

「なに!？」

と言つて、俺は後ろを向く。

…だが、そこには突き刺さつた矢のみ。

俺は、ただ嘆いた。

「ロシル！引き金を離して！」

「ノエル！？あ、ああわかった！」

そういわれるがままに俺は引き金から指を離した。
すると、今までの衝撃が嘘のように、スツと反動が消えた。

「ふ、ふう……すげえ……な、これ……」

「それが、君の魔力……？へえ、やっぱり才能あるね、ロシルくん」

「さい……のう……？」

「ええ、ノエルが気に入るわけだ」

「は、はは……うっ……」

そこで、俺は……気が付いた。

自分の胸元に……矢が刺さっていることに……。

「ククク、ついに……呪文を手に入れた……ぞ……感謝する、ロシル……ぐあ……はっ……むんっ！」

服がボロボロで、重傷を負っているはずのエイピロの最期の一撃だった。

そして、エイピロは何かを使って、そこから一瞬で消えた。

「…とりあえず、ロシル…話したいことがあるの」

「…わかった」

これが・・・俺の魔術師への一歩だった。

裏第一話 エドワード（前書き）

この物語は、ノエルが魔術師になる前の物語…。
ノエルの師、エドワードの物語です。

裏第一話 エドワード

俺たちには、俺たちしかいなかった。

世界という言葉は、俺たちの事とばかり思っていた。

他者と触れ合うなんてことはなく、またそれに担う事もない。

そういう考えがあった。

俺、エドワード・フォートはそう思う。

「ああ…まだ降るのか、まったく…飽きやしないな…雨って野郎は」

「ふ、まあ、よいではないか、エドよ」

「ソーソー、僕たちにとって、雨は母だぜ？母なる聖地、ここ【アルフェグラ】に生まれた聖子」

「それを、ただ汚すという事は許されるまい、リーダー」

「…そうだな、アルフェグラは、俺たちの聖地だ」

俺たちは、ここをアルフェグラ…大いなる楽園と呼んだ。

俺たちしか住んでおらず、廃墟ビルや腐った肉。

その他人工的に作られた施設なんかも崩壊している。

昔、大空襲によって、ここは崩壊した。

その際、俺には家族というものがあつたが、皆空襲であの世に逝つた。

俺は、自宅にいて、そこで空襲を受けたが、奇跡的に生き延びた。

母が、俺を土に埋めたからだ。

大きめの五右衛門風呂のようなものを、土を掘って入れて、そしてそれの中に俺を閉じ込めた。

しばらくして、母は紐をその中に入れた。
自力で抜け出すためのものだ。

母は、最期に何か言い残し、そして土に埋めた俺を置いて去った。
俺はその時、母の事が好きだった。

母は、俺の一番の理解者で、俺にとって、唯一の肉親。
父は早く亡くなった。

兄弟は、おらず、俺一人がそこにいた。

そして、俺は紐を引っ張る。

母に会うために。

そう、俺はこの時、母に捨てられたと思っていたんだ。

だから、待って、行かないで。と、そう言いたかった。

けれど…。

母は、去ったあと、俺の食事として、飴袋を持ってきていた。

飴袋の名前は、アルフェグラ。

キャラメルとかイチゴとか、とにかくバリエーション豊富な飴がた
くさんあって、子供に大人気だった。

俺が土から出てきたのは、母が俺に飴袋を置こうとしたときで…。

その時、空襲が俺たちの家を襲った。

無論、家は全壊。

俺は、激しい音を聞いて、慌てて外に出ようと紐をひっぱった。

すると、土に被っていただろ蓋が、どんと土を押しの上
へ上へと上がる。

どうやら、井戸か何かにひっかけていたようだ。

空襲が来ていても、なぜかこの紐が千切れなかったことは奇跡に近
い出来事だった。

「お母さん…お母さん！」

俺は叫んで、そして…ようやく土を押しつけ終わったところで、かぶ
っていた土が五右衛門風呂へと侵入してくる。

「…ああ、アルフェグラ計画、スタートだ」

俺たちは、ここ、アルフェグラの領地拡大をするために、他国へ戦争を仕掛けるのだ。

それが、アルフェグラ計画。

俺たちの…国造りだ。

第九話 ラゲナ

矢を刺された痛みはほんのわずかで、俺はその治癒をしてもらいながら、ノエルと話をした。

突き刺さった矢は、どうやら何かの魔法がかかっているようだ。

魔法とは、魔導によってかけられたいわば呪文の魔導師バージョンというものだ。

俺は、そこから・・・1の呪文、『構成』が取られたようだ。

1の呪文がないと、呪文はおろか魔力を使えない。

それに、俺は1日で死んでしまう。

1の呪文と肉体は、一心同体。

幽体離脱が許されるわけもない。

「ロシル、やっぱり、1の呪文がないと・・・」

「...ああ、やっぱり...ないと死ぬのか？」

「ええ、...でもまさか取られるなんて...」

1の呪文は原則自身の中で眠っているはず。

なのに、何故か奪われている...。

これは、おそらく...あの矢に、1の呪文「奪取」が付けられていたとしか...。

と、すれば、狙いは...魔術師である、私のはず...。

どうして、ロシルを？

そうノエルは心の中で思っていたが、俺にはわからなかった。

「ロシル、あいつ何か言ってた？」

「…いや、ああ、そういうえば…『私は、このラ・ビネスチエを扱うアーチャーの魔術師…これぐらい明かせばわかるだろう?』とか言ってたな…よくよく考えてみると、魔導師が、魔術師なんて名乗るものなのか…?」

「ラ・ビネスチエを扱うアーチャーの魔術師…!?それ、本当なの!?」

「あ、ああ…」

ノエルの体が震える…。
まるで、凍えるように。
どうしたのだろうか。

「ノエル?」

「…メリュジーヌ…」

「え?」

彼女は、不安な顔になる。

俺は険しくなる彼女の横にいたはずの本屋さんがいなくなっている事に気が付いた。

「あれ?本屋さんは?」

「…!そつだ、ソイルが!」

そういつて、慌ててノエルは家を出て行った。
俺もそれに合わせて外へ出ると、

そこで、突風が向かってきた。

俺は、両手で顔の前を防ぐ。

その突風の中に、草や石、そのほかの砂やそこらへんにある土層が
挟られているように、それが段々と大きさを増しているのがわかる。
まるで、核爆弾が落ちたようだ。

「くそつ、なんだってんだ！」

「ソイル…もしかして…『レ・クエンドリフ』を…!？」

「…『レ・クエンドリフ』？」

「エーテルフ語…つまりは、ここの国でたまに使われる言葉…意味
は、『絶望』…」

「!？」

絶望…それは、望みこそない絶体絶命的状況にいる人物の心情を表
したものとも考えられる…。

だとすれば、この場合の絶望は…死…!？

「ソイル！」

俺は思わず叫ぶ。

その先に、見るキノコ雲。

それは、冗談では済まされない。

…まさか…絶望とは、死を表し、それがトリガーとして扱いを受け
るとすれば…。

それは、爆弾。

死というタイマーで動く爆弾の爆発を意味するとすれば、この状況

は合致してしまう。

「『レ・クエンドリフ』は…死と同時に自らを爆弾として、周囲直径3kmをチリと化すぐらいの威力はある超強力な魔法よ…自分に魔術師にも魔導師にもなるような能力はないからと言って、契約したの…。エーテルフは、悪魔の事よ…人との交わりを好み、それ故に彼らは人間との交わり…つまりは、契りを誓うの…それによってできあがった契約名を全てエーテルフの適当な言葉で埋められる…だから、エーテルフ語」

「待てよ、ソイルはもしかして…」

「そう、契約したのよ、エーテルフと」

悪魔との契約…そして、トリガーは死…。
待てよ、もしかして…

「なあ、もしかして『ラ・ビジネスチエ』ってのも…」

「そうよ、それもエーテルフ語…けれど、その意味は、『幸福』…つまりは、死なないって事ね」

絶望は死、幸福は生という事が…。

「とりあえず、急ぎましょう…」

そういつて、ノエルは駆け足になって、走る。
続いて俺もついて行く。

…この後に見たものは…。
確かな絶望だった。

「ふい〜…なんだよ、服が焦げちゃった…ケツ、この程度の奴だったのかよ、失望したぜ…なあ、ノブ子」

「…」

そこには、本屋さんが何かを覗いていて、そして…大鎌を持ったフードコートの男…確か、シフォンとかいう奴が、失望したようにそう言いこぼした。

「ソイルを…」

「ああ、あのザコか…消し飛んだよ」

「くそ！」

「シフォン…あなた…」

ノエルは、手を震わせて、シフォンを睨みつける。

「おお、怖い怖い…」

「イールグ」

と、ノエルは手のひらに風を圧縮して風の玉を生み出し、そして…手を横に振って、それをシフォンに投げつける。

風の玉は、シフォンの近くまで寄ると、突風となって、周囲の風をも吸い込んだ。

「クツ、流石…ノエル…メリュジーヌとの戦いから、おおよそ2年…つてところか？衰えてねえよなあ…その腕」

「ラ・ビネスチエを使う魔術師なんて名乗っている魔導師…あんたのところにいるわよね？」

「いきなり聞いてどうする」

「ソイルは…確かに肉体的には滅びたわ、しかし、魂はある…冥界に行けば、ソイルを取り戻すことができる…」

「察しはついた…しかし、戻ってこれるかわからないのだぞ」

俺には、二人の会話がよくわからなかった。

なんたつて、二人の会話は、固有名詞に近いものが、多すぎる。

ただ、今からすることに無茶があることは、言葉を聞けばわかった。

「フォーミル王に会わせなさい、そしてそのラ・ビネスチエを使う魔術師にもね」

「…こちらの方が一枚も二枚も上手うわてだぞ？」

「どうかしら…ねっ！」

ノエルは、「グレイグ」と言葉では表せない言葉で、唱えた。

すると、ノエルの背後に、5つの剣が姿を現した。

第十話 グラム

「グレイグ：5本の剣を自在に操る呪文：しかも、その一つ一つが、宝刀と化すというもの：確かに、それならば、俺の『バルディッシュ』と対等かもしれないな」

そういつて、シフォンは、持っていた鎌を見下げて、それをブンツと横ふりをした。

本来、バルディッシュとは、武器の特徴として、斧のような形に、長い柄。

それは、刃を重心として人の胴体すらも切断するとして、知らされている。

：バルディッシュという名の大鎌なのかもしれない。

しかし、その鎌につく刃というと、まるでそれこそバルディッシュの刃をそのまま伸ばしたものに相違ないとも思えた。

それを、思い切り振ったのちに、そこに衝撃波によって生まれた突風が、俺たちに襲い掛かる。

俺は、そのまま動けず、ただその見えない真空波に怯え、本屋さんは、それを見て不意に俺の前に背を向けて立つ。

そして、自分の右手の親指を歯で噛み、そしてそこからぷくりと膨れて溢れ出てきた血が、親指の上にたまる。

それを、パツパツと手首を左右に二度振り、緑のなくなった高原に散らす。

そして、自分の親指を噛んだ右手で、手を広げた左手に、血で円を描いて、右手を左手の上に乗せて一気に、地面へと叩き込んだ。

その動作は、一瞬で、数秒で完成した。

血が、荒廃した土につくと、そこに、土が盛り上がり、土の壁ができあがる。

しかも、ただの土ではなく、それは赤土に、さらに砂鉄を混ぜられ

ていて、それに、レンガブロックのような形となり、衝撃波を防いでいた。

そして、ノエルはというと、5つの剣がまるで意志を持つかのように、ノエルの前へと出てきて、回転を始めて扇風機のようになり、突風を弾く。

「私が、こいつを抑える。その間、ロシルに、アレ、を渡してちょうだい、ノブ子」

「…ノエル、いいの？」

「ええ、どうせあいつも、私が目的なんだし…それに、ソイルの敵^{かたき}としては、一度ぶん殴ってやらないと、気が済まないのよ…」

ノエルの手は、ブルブルと震えていた。

俺は、それを見て、自分は非力である事を思い知った。それもそうだろう。

自分はここで生まれたわけでも、ここで過ごしてきたわけでも、ここで修業やらなんやらやってきたわけでもない。ただ…ただ…。

…俺は…一体、何をやっていったんだ…。わからなくなった。

自分が、それをさとする事すらなくて、ただいきなり魔術師やらなんやらに巻き込まれて…。

けれど、これだけは…これはだけは…ハッキリしたい。

俺は、ノエルを、守りたい、のかそれとも、ノエルに、守られたい、のか、それを…ハッキリしたい。

俺は弱かった。手段として、俺は必然的に後者を選んでしまった。

…それは、辛くて…。

非力な俺が憎くなった。

そんな事を思っていると、本屋さんが、手を伸ばし

「ロシルくん、私と契約をしなさい」

と言ってきた。

「契約？」

「ええ、手を出して、そこに私とあなたの血を混ぜるわ、大丈夫よ、魔術回路を開放していれば、こんなの余裕だから」

「…わかった」

本屋さんは、それを聞くと、口元で何かを唱えた。

すると、そこに風で飛んできた草が、俺と、本屋さんの手と手の間を通り、二人の手の平をゆっくりと裂いてゆく。

それに対して、俺は何か摩擦があった程度の事しかなく、そのまま垂れ行く血の行方すらわからなかったろう。

俺は、本屋さんを見続けていたのだから。

彼女の一目してブサイクにも見える顔は、グルグル眼鏡の透けたときに逆転する。表情が見えるのと、見えないのとは、こつも変わるものかと思えた。それは、その眼鏡の中にある、煌^まびやかとしたかわいらしい瞳にあった。

どう見ても、美少女である。

頬についたそばかすをも巻き込んで、それさえもが美に変わるようである。

そんな素顔を俺は見続けていた。

「はい、血の契約は終了したわ、ロシルくん、…ってあれ？どうしたの？？おいローシルくん？」

「…ハッ、はい！ど、どうしたんだ？」

「今から、あなたに力を与える権利を渡すわね」

「権利？物そのものでないのか？」

「ええ、これは権利よ。魔術師として生きるなら、すべての場合とすべての場所において、その確定した物体を任意的に取り出さなければ、魔術師として生きることができない、それは原則よりも何よりも、大切な事になるのよ」

「そうなのか」

俺は、本屋さんの手と俺の手の間に、電撃が走る。

これ…魔導師の…。
投影武装だっけか…ここから、何かが生まれるのか…！？

「投影武装の使い方は、簡単よこうやって生み出して…」

「わかるかあああ！…！」

「まあ、落ち着きなさいって」

俺は、電撃を広げる。

そのまま広げていくにつれて、それは段々と姿形を露わにした。それは…剣だった。

刀身こそ、両手剣に見え、そしてその形は、普通に見える。しかし、その鏢に見える模様は、蛇。

そして、柄には龍。

刃の色は、赤い。

そして、電撃は、だんだんとその形を作っていくうちに消えてゆき、そしてそれを手にとって、ブンツと振って、俺は自分の手に収める。見れば見るほど別段変哲もないものだ。

変わった形ではないし、かといって、短いわけでも長いわけでもない。

普通の両手剣。

けれど、赤い刃が目立つ。

それを見て、俺はこれで大丈夫かな…なんて、心配する。

「…」

「私は、ノエルの支援をするわ、ロシル君は…そうね、とにかくそれでどうにか攻撃は避けてね」

「そんな…無責任ですよ、俺なんて、初めてこんな…剣な…んて…」
いや…知っている。

剣を知っているのは当たり前なのだが、それとは違った。俺は、明らかにその使い方、扱い方を知っている…。

それも、どこかであつかつた事がある。ということだ。

俺は…一体、どこでこれを…。

そう思ったとき、ノエルと本屋さんは戦いを再開した。

第十一話 シェイノ

「宜しいのですか！？あいつは…あいつは、重罪刑を受けた犯罪者ですよ！？」

「かまわん、シェイノ・チャルを解放しろ」

「…何が起こっても、我々、処罰人パトリオンは何も責任を問わない。これは覚えておいてください」

「百も承知だ」

私、ラグナ・フォーミルは…国王として、国の裏切り者を管理している監獄の裁判官、パトリオンを扱える。いや、国そのものを動かす権力を持っている。

…しかし、問題があるとすると、世継ぎだ。

私は、ここから…王宮フォーミル城を動くことを禁じられて、ずっとここにいます。

そのため、他の場所からの使者に、使い物を頼む。

酒、遊具、そして女…。

皆、私の動くことなく手に入る。

しかし、そんな私でも手に入ることがないものがある。

…ノエル・フォート…。

あの娘を、妃にしようという考えを、私の絶対権限を振るっても、あいつは動かない。

いいや、破棄すらしようとする。

権限を振るう暴君わたしに、抗うというらしい。

ククク、まったく。楽しいものだ。

ここまで抗う女は初めてだ。

国王の命令とあれば、平気で体を差し上げてくる女共と違い、金にも目がくれず、ましてや権力者というものすらも、捨ててしまおうな、そんな愚かな女。

それをどうしても、手に入れてみたい。

ああ、それこそ至福であろう。

きつと、こんなつまらない宮殿の永遠のペットとして生きる惨めな姿を、私は想像していたろう。

ああ、嬉しい、嬉しい。

嬉しい、嬉しい、嬉しい。

思わず笑みがこぼれる。

…しかし、最近現れた見習い魔術師とかいう奴が、ノエルの元にいるという。

魔術師は、跡継ぎのために魔術回路をつなぐ。

そして、魔術師は、1000の呪文を手にしたものを言うが、その権限を移す時、1000の呪文をも失う。

実は、1000の呪文というものは、継いだ魔術師の1の呪文とされ、そして継がせた魔術師は、自らの使命を全うし、安らかに眠りにつく。

死という物に似たものだ。

凍結。それに相応しく、生きたまま、そのままを保って肉体から引き離された精神のみが、天に召される。

そして、新たな命として、再びこの世に舞い戻り、赤子として母体に宿る。

…人間のシステムは、それと同じようなものだろう。

肉体に有限はなく、作り出すことができるが、精神は有限。それが、このシステムの関係を作り上げた。

「…なあんて、私は何を考えているのだろうか」

つまりは、ノエルの心配をしているという事だ。

あの見習いが、どんな奴かは興味はないが、私のノエルを傷つけようものならば、生きていけると思わないことだな…。

「フフフ、ハハハ、アツハハツハ！」

「フォーミル王…連れてまいりました…19932番…シエイノ・チャルです。ほら、19932番」

そういつて、パトリオンに鎖でつながれながら現れたのは、背が150cmも満たないような少女だった。

濃い青色の髪を持つ彼女は、その髪を肩あたりまで伸ばしているが、何も装飾品がなく、自然のままの髪が、若干吹く風で、靡いていた。そして、その少女は、私を見る。

顔をあげて、彼女は少し目をそらそうとする。

…そもそも、少し薄暗いここは見えるものと見えないものがある。

前者は、それぞれの人数。

後者は、その顔だ。

少女は、確かにこちらを見ているはずなのに、目が見えない。

…いいや、違うな。

髪で隠れているとばかり思ったけれど、それは違う。

こいつ…アイマスクを付けられてる。

それに、腕には手錠が三重。

足には鉄球が両足につけられている。

それでいて、普通に難なくそこにいた。

苦しそうな仕草を見せず。

そこにいるというだけでも重苦しい重量が襲うはずなのだ。だが、彼女は平気でその場にいる。

震えもなく、恐怖というものすら感じていない。

…こちらが震えてしまいそうだった。

「あなたが、我が主君となる王…フォーミル・ラグナ？」

「…ああ、そうだ。お前の体…頭の毛から足の爪の先まで、すべてを私に尽くすために捧げよ」

「では、フォーミル王…チェーン首輪を」

私は、手にあつた、それ、をそいつに手渡した。

…そこから黒い霧が現れ…。

「絶対服従を誓え、シェイノ・チャル」

「…」

シェイノは、頷くことなく、光を亡くした瞳で、薄暗い地面を見ていたろう。

…いいや、アイマスクされているせいか、それはかなわない…か。

「チャル家は、代々受け継いで来た遺伝子細胞バルテミリアがある。それは、血の中にある動脈が、どういうわけか目からの別の力となって、体中に送られる特殊体質…だ、視力とは違うそれは、今発見されている中で、音速を超える速さで動く事が出来る目、目で見たものを全て焼き払う目、空間を捻じ曲げて、そこに新たな物質を生み出すことができる目、目を合わせた相手の行動を逆転させる目…ほかはまだ知らないが、この程度あるのは分かっている、お前は、目で見たものを全て焼き払う目、を持っていて、故にアイマスクを付けているが…」

こんなもの、服従を誓った私に向けられるはずがない。そう思った私は、アイマスクを外す。

「今日からは、私の奴隷だ、私がしろと言えばし、そして…望むとあらば、体を捧げ、私の身を守れ」

「…イエス、マイ…マ…マスター」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2137w/>

見習い魔術師の100の呪文

2011年12月24日01時52分発行